

進修館における武士教育

濱田臣二

The Education for Bushi in Shinshukan Shinji HAMADA

はじめに

中央集権的封建制度によって統治された江戸時代は、鎖国により諸外国の文明・文化の影響を受けることが絶たれた。しかしながら、泰平の世の恩恵を受け、国内での学問や文化が著しく発展した。家康から3代家光の頃まで続いた武断政治は、4代家綱の頃から次第に儒教思想による文治政治へと転換していった。

そうしたなかで徳川幕府は、儒学尊崇政策により封建社会の確立につとめ、幕藩体制の安定のために武士の教育機関として各地に藩校設立を奨励した。各藩は藩政改革の一環として、財政難の藩においても、苦心しながらこぞって藩校を設立した¹⁾。

中津藩では、黒田孝高（官兵衛）が天正16年（1588）に中津城を築城し、城下の発展に取り組んだ。この黒田氏から細川氏・小笠原氏へと継承され、それを引き継いだ奥平氏は、初代昌成以降、中津藩を代々統治し、154年間、9代にわたり藩政を取り仕切った。中津藩も例にもれず、藩の安定のために儒学を柱とした教育に力が注がれ、文武兼修が奨励された。その中核となったのが藩校「進修館」である。

これまで著者は、拙稿『中津藩における近世の武芸流派について²⁾』において、中津藩で教授された武芸流派の特徴についての解明を試みた。中津藩における近世の武芸教育は、進修館を中心に城下の師範家の道場でも行われ、全部で9種目22流派の武芸が教授されていた。しかしながら、中津藩の武芸教育の一端を解明したに過ぎず、文武教育全般についての内容や実態等についての十分な解明には至らなかった。



図1. 中津城天守閣から現在の城下を望む

そこで、本研究は進修館の創建から閉校に至る社会背景を通観しながら、教育目的・方針、生徒数、教習科目・武芸種目、文武教員数及び各武芸教員数等について、他藩校と比較・考察し、教育的特徴を解明することを目的とする。

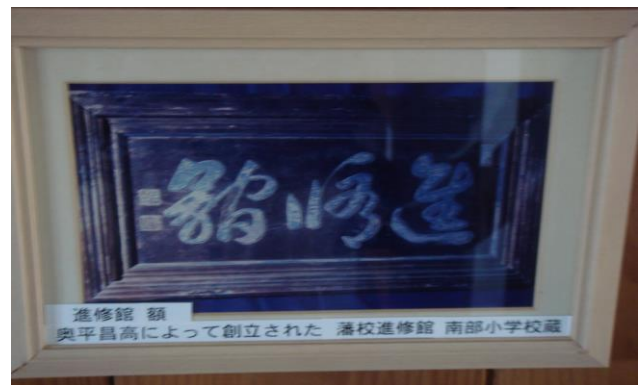


図2. 進修館の扁額

1. 進修館の創建

徳川幕府は文治政治の先駆けとして、寛永7年（1630）に江戸忍ヶ岡に学問所を創立し、儒学強化を行った。これが後の昌平坂学問所である。

全国的に藩校が設立された時期については、寛文～貞享年間（1661～1687）4校、元禄～正徳年間（1688～1715）6校、享保～寛延年間（1716～1750）18校、宝暦～天明年間（1751～1788）50校、寛政～文政年間（1789～1829）87校、天保～慶応年間（1830～1867）50校、明治元年～4年（1868～1871）36校、年代不明4校の合計255校といわれる³⁾。進修館は、79番目以降であり、全国的な藩校設立の流れに乗って造られたものである⁴⁾。

また、近世初期には9校、中期57校、末期156校が造られ、殊に寛政年間の12年間は最も多い31校が造られた⁵⁾。この頃以降の藩校の激増は、単に幕府を背景とした影響だけでなく、近世中期以後の崩れた諸藩の財政を立て直し、武士生活の窮迫を打開する方策として、優れた政務担当の人物を育成するためでもあった⁶⁾。

我が国の藩校数については諸説あり、多いものでは280校⁷⁾、さらに江戸時代を通じて明治4年（1871）の廃藩置県までに225校が開設されたとの研究⁸⁾もある。

近世の豊前・豊後国にあたる現在の大分県においては、九

図3. 進修館の跡地 生田門（現在の南部小学校）

図4は、近世末期の進修館の見取り図¹⁹⁾である。これは、史蹟名勝天然記念物調査報告書第十三輯²⁰⁾にあった図をもとに作図したものである。建坪は247坪で約780㎡であった。進修館の敷地内は、剣術と槍術の稽古場で占めていることから、

これらの流派が特に盛んに行われていたことがうかがえる。進修館での武芸教育は、敷地内の稽古場および師範家の道場等において行われていた²¹⁾。

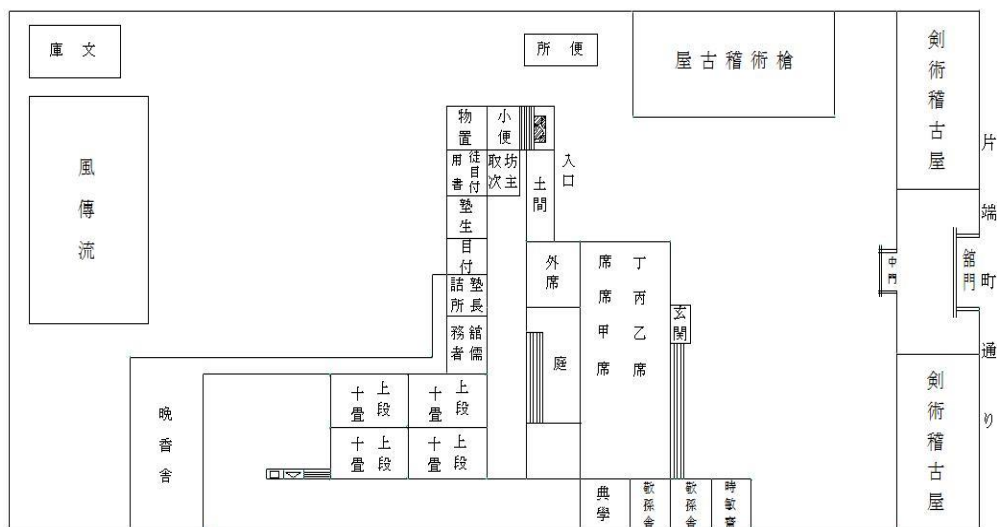


図4. 近世末期の進修館見取り図（約780㎡）

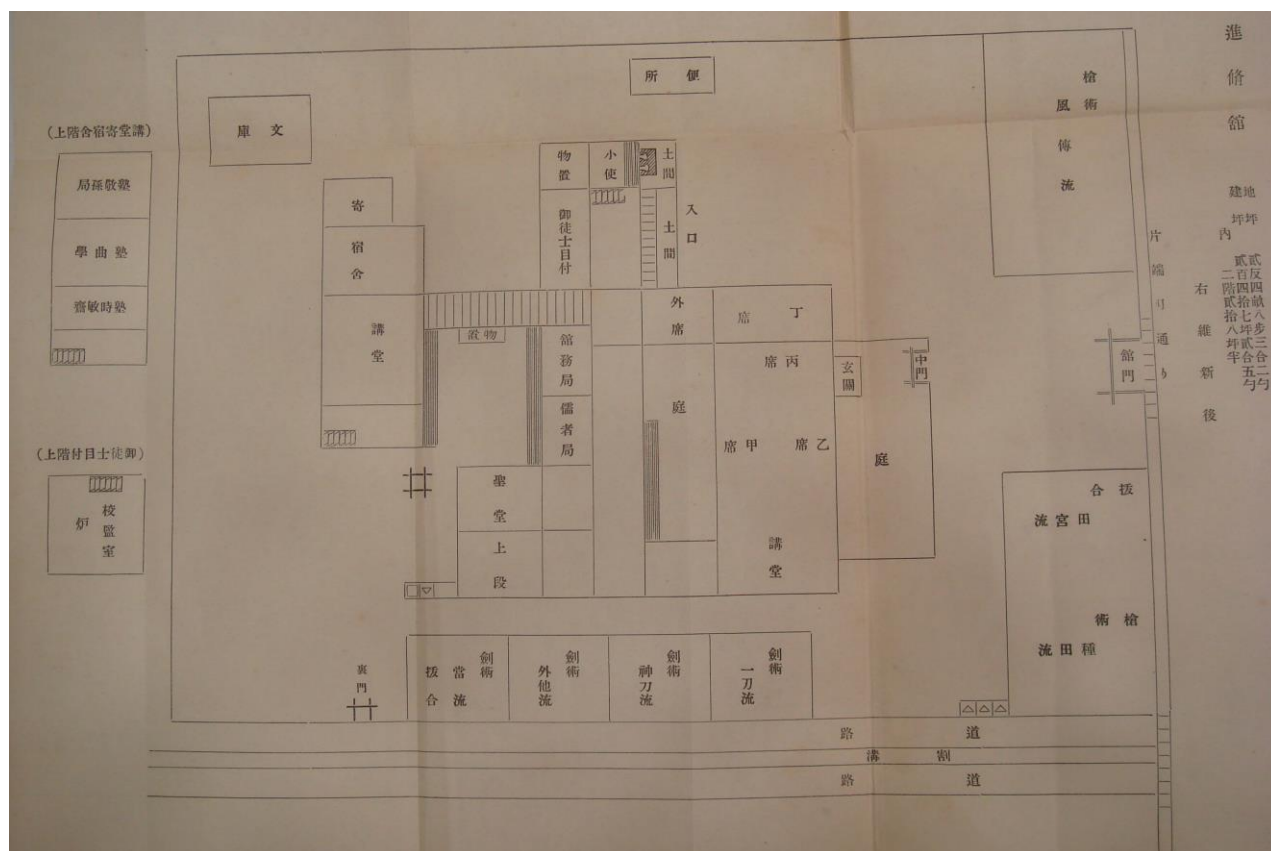


図5. 明治維新後の進修館見取り図（約817m²）

図5は、明治維新後の進修館見取り図²²⁾である。建坪数が増え、武芸稽古場は流派ごとに使用場所が決められ、敷地内では主に剣術・槍術が行われていたことがうかがえる。

図4・5を比較すると、江戸末期には建築面積が約780㎡であったが、明治維新後には約40㎡増築して約817㎡になっている。創建後に時代の流れと共に必要な施設が増築されてきた。

2. 進修館の教育

(1) 各藩校の生徒数

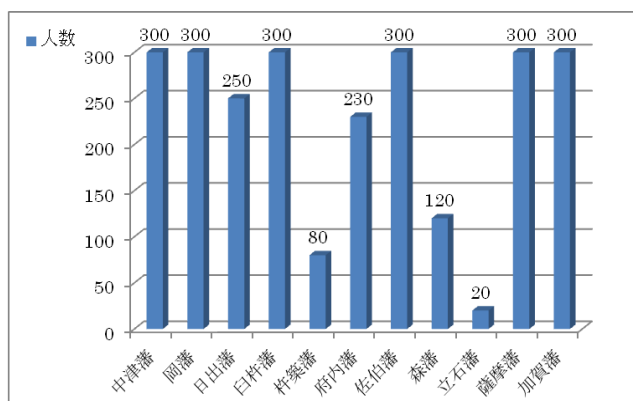


図6. 各藩校の生徒数

それぞれの藩校に通った生徒数については、図6のとおりであった。大分の9藩校では進修館（中津藩 10万石）・修道館（岡藩 7万石）・集成館（臼杵藩 5万石）・四教堂（佐伯藩 2万石）が約300名、次いで致道館（日出藩 2万5千石）250名、遊焉館（府内藩 2万1千石）230名、修身舎（森藩 1万2千石）120名、学習館（杵築藩 3万2千石）80名、無逸館（立石藩）の順であった^{23,24)}。また、造士館（薩摩藩）・明倫堂（加賀藩）も300名であった。加賀藩（102万石）や薩摩藩（77万石）の石高から考えても、10万石の中津藩や大分県のその他の藩校の生徒数はそれらに劣らないものであり、活発な教育が行われていたことがうかがえる。



図7. 近世の石垣が残る現在の南部小学校玄関

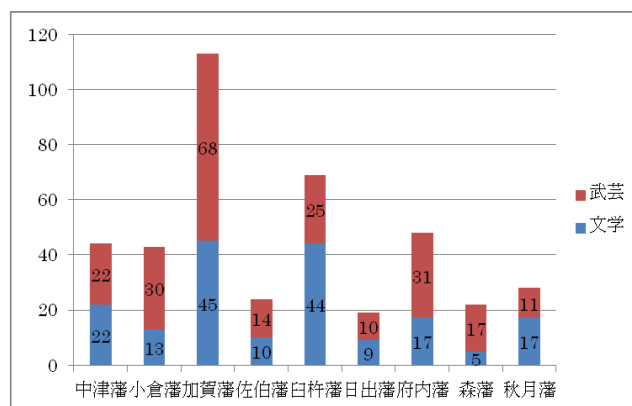


図8. 各藩の文武教員数の比較（人数）

(2) 文武教員数

図8は、各藩の文武教員数について比較したものである。進修館の文武教員数は文学22名・武芸22名であった。以下、同様に四教堂（佐伯藩）10名・14名、集成館（臼杵藩）44名・25名、致道館（日出藩）9名・10名、遊焉館（府内藩）17名・31名、修身舎（森藩）5名・17名、思永館（小倉藩 15万石）13名・30名、稽古館（秋月藩 5万石）17名・11名、明倫堂（加賀藩）45名・68名であり²⁵⁾、加賀藩が圧倒的に多かった。

文学教員数と武芸教員数については、元文から寛延（1736～1763）頃までは藩校の数も少なく、師家道場の指導者が圧倒的に多かった。宝暦（1751～1763）頃から次第に文武教員両者のバランスが保たれ、文化・文政（1804～1829）の頃には文学教員数が増加していった。これは寛政9年（1797）に昌平黌を官学とし、昌平坂学問所に改称し整備されたことにより、各藩が藩校設立に力を入れたためであり、文学に力が入れられた²⁶⁾ことによる。

しかしながら、天保（1830～1843）頃になると、国内外の情勢に変化がみられ、国防を重視しなければならなくなった。そこで、洋式兵学等も導入され、武芸が強化されるようになり、文武併設の藩校の設立が増加していった。このような傾向は、慶応年間（1865～1867）に至る²⁷⁾までみられた。

(3) 文学教科

大分県の9藩校における教科については、下記の表1のとおりである。表1は『大分県教育百年史²⁸⁾』にある表を改変したものである。漢学は、大分県内すべての藩校で教授され、以下筆道（8校）・算学（7校）・国学（6校）・医学（6校）・習礼（5校）・洋学（5校）であった。7教科が最も多く、2教科のみの藩校もあった。医学や洋学を教授していた藩校が多いことは、実学主義の影響として推察される。

大分県内では、筆道も8校で教授されるほど重視され、算学も7校と多く教授されていた。また、洋学は藩の必要性に影響を受けていたと考えられる。

	漢学	国学	洋学	医学	算学	筆道	習礼	教科数
進修館(中津)	●	●	●	●	●	●		6
修道館(岡)	●	●	●	●	●	●	●	7
致道館(日出)	●	●	●	●	●	●	●	7
集成館(臼杵)	●	●	●	●	●	●		6
学習館(杵築)	●	●	●		●	●		5
遊馬館(府内)	●			●	●	●	●	5
四教堂(佐伯)	●	●		●			●	4
修身舎(森)	●				●	●	●	4
無逸館(立石)	●					●		2
実施校数	9	6	5	6	7	8	5	

表1. 大分県の藩校における文学教科数

教習科目は、岡藩と日出藩が7教科で中津藩と臼杵藩は6教科であった。中津・臼杵藩は、教科のなかで習礼のみが行われていなかったが、武芸の技術には礼儀作法も含まれるため、稽古の中で教授されていた可能性もある。立石藩は、規模が小さく生徒数も少なかったため2教科であった。進修館における教習科目は、国学・漢学・洋学・医学（漢洋）・筆道・算術であった。また、医学に関しては重罪人に対する解剖も行っていた。

(4) 武芸教員数

図9は、各武芸教員数の割合について比較したものである。中津藩と小倉藩は、割合には差異があるものの同様の傾向を示し、同種目の教員が配置されていた。両藩において、最も多かったのは剣術で、中津藩では次いで槍術、小倉藩では柔術であった。また、臼杵藩では槍術が最も多く、次いで兵学・弓術・砲術であり、以下、剣術と馬術で水泳の教員は配置されていなかった。さらに加賀藩は、5種目しか配置されず、剣術が最も多く、次いで馬術の順であり²⁹⁾、偏りが大きかった。

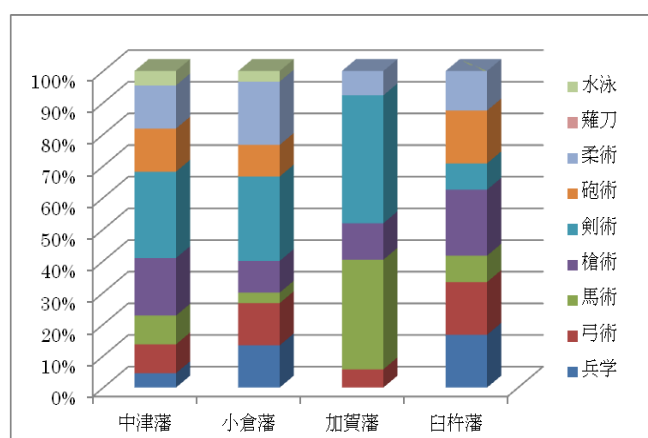


図9. 各武芸教員数の比較

進修館の武芸教員数は、剣術（6名）、槍術（4名）、柔術・砲術（3名）、弓術・馬術（2名）、兵学・水泳（1名）の順であった。

ちなみに進修館が創建された寛政～享和（1789～1804）年間における全国の武芸教員の割合は、剣術34.1%、馬術28.11%、槍術11.53%、砲術8.75%、弓術8.29%、柔術5.52%、兵学・水泳各1.38%、薙刀0.92%であった。剣術3割強、馬術3割弱を占め、この時期に創建された加賀藩の明倫堂は、剣術・馬術が優勢でこれと同様の傾向を示した³⁰⁾。

藩校を全国的にみると、剣術指導者が絶対に優勢で全体の3割に近い28%を占めている。以下、馬術（15.13%）、砲術（14.25%）、槍術（12.5%）、柔術（10.03%）、弓術（9.32%）、兵学（7.4%）の順になっている。これらの割合は、江戸時代から明治時代にかけて著しい変化もなく推移していくが、砲術指導者に限っては、天保（1830）以降から著しく増加していった³¹⁾。これは、国防のための教育によるものであると考えられる。

進修館は全国的傾向と比較すると、多種目の指導者が配置されており、各種目に平均的な指導がなされていたことがうかがえる。また、「兵学 弓術 馬術 砲術 遊泳等ハ館外ニ於テ演習ス³²⁾」とあり、進修館の館外で稽古が行われていた。

武芸流派について、『日本教育史資料³³⁾』には下記流派の記述があり、前述した各種目指導者割合とは若干異なっており不詳の部分がある。

兵学（甲州流）、弓術（雪荷派・印西派）、馬術（八条流・山形流）、剣術（一刀流・外他流・戸田一刀流・神当流・東軍流）、槍術（風伝流・種田流・本間流・竹内流）、砲術（荻野流・長谷川流・稲留流）、抜合（民弥流・新流）、遊泳、柔術（起倒流・揚心流・吉岡流）

本論では、武芸指導者数について、『修訂十九世紀に於ける日本体育の研究³⁴⁾』のデータに従い作図・考察した。

おわりに

徳川幕府は幕藩体制が安定してくると、儒教思想による文治政治へと転換し、各地に藩校設立を奨励した。各藩は藩政改革の一環として、財政難のなか藩校を設立し、優れた人物の育成に努めた。

中津藩では、5代藩主奥平昌高が全国的にも最も多く藩校が建てられた寛政年間の寛政8年（1796）に進修館を創建した。進修館は全国二百数十校のうち、79番目から110番目の間に造られ、全国的な藩校設立の流れに乗ったものであった。進修館の果たした役割は大きく、幅広い分野で優秀な人材を輩出したが、明治5年（1872）の廃藩置県によって閉校となった。

藩校の発達過程による類型において、進修館は藩が城内に講堂を設け、儒者を招いて講習させたものが発達して藩校となった講堂型に属する。学風は創建当初は朱子学によるものであったが、まもなく古義学が主流となり、文武両立の教育を目指した。

学習内容は、国学・漢学・洋学・医学・筆道・算術の文学と武芸であった。武芸種目の剣術・槍術は館内で盛んに教授された。一方、兵学・弓術・馬術・砲術・遊泳は館外で行われた。

生徒は、7・8歳で入学し、決められた修了年限はなかった。武士の子弟だけでなく、平民の子弟にも門戸が開かれて幅広く藩民の教育の中心となった。中津藩の石高は10万石であったが、加賀藩（102万石）や薩摩藩（77万石）の大藩などにも遜色ないほどの300名という生徒数で熱心な教育が行われた。進修館のみならず、大分県の藩校は、それぞれの藩の石高から考えると、比較的生徒数が多く、教育に対する意識が高かったことが推察される。

文武教員数については、文学教員・武芸教員共に22名であり、バランス良い配置がなされていた。合計人数は、小倉藩（43名）とほぼ同じであったが、小倉藩は文学教員13名、武芸教員30名と武芸教員の比率が高かった。全体的に武芸教員数が多い藩が多かったが、進修館では文学教育にも力を入れていたことがうかがえる。

各武芸教員の割合については、剣術、槍術、柔術・砲術、弓術・馬術、兵学・水泳の順であり、思永館（小倉藩）とほぼ同様の傾向を示した。この二つの藩は、文武教員数・各武芸教員数など類似点が多かった。地理的に近いことから、相互に何らかの影響を受けているのかもしれない。

各藩が藩校を積極的に設立した時期は、武芸流派の創流時期と併せて考えると、元禄太平の武芸の停滞期で形式化した時代を過ぎて幕府が武芸奨励をした「第二期」新流派成立の時代と同時期であった³⁵⁾。その前の「第一期」は、家光晩年の頃、それまでの総合武術から個性化した流儀ができあがる頃であった。中津藩では、この「第一期」新流派成立の時代に創流された流派（13流派）が多く、「第二期」に創流された流派がなかった。これは、同じ豊前国であった小倉藩が「第二期」に創流された流派が多い³⁶⁾ ことと比較すると、

保守的な側面や何らかの事情があったものと考えられる。

したがって、中津藩では比較的早い時期に創流された創流された流派が浸透し、進修館や師範家で教授されていた。

進修館の創建から閉校に至るまで通観すると、前述のような特徴があり、約80年間にわたり、10万石の中津藩の藩士育成のために重要な役割を果たしていた。

以上、史料収集可能な範囲で進修館における武士教育について考察を試みたが、それらの一部を解明したに過ぎない。今後は、進修館の教育の波及実態や武芸各流派の伝系及び修行の実態等を明らかにすることが課題である。それらが解明されると、武道史や中津郷土史の研究がさらに進展するであろう。

参考・引用文献

- 1) 今村嘉雄，修訂十九世紀に於ける日本体育の研究，第一書房，1989，P377
- 2) 濱田臣二・矢野真宏，中津藩における近世の武芸流派について，北九州工業高等専門学校研究報告第47号，2014
- 3) 大石学編，近世藩制藩校大事典，吉川弘文館，2006，PP146-147
- 4) 前掲書3)，P147
- 5) 中泉哲俊，日本近世学校論の研究，風間書房，1976，PP42-43
- 6) 前掲書5)，P43
- 7) 大分県教育庁総務課 大分県教育百年史編集事務局編，大分県教育百年史第一巻通史編（1），大分県教育委員会，1976，P111
- 8) 前掲書5)，P43
- 9) 前掲書7)，P111
- 10) 黒屋直房，中津藩史，国書刊行会，1987，P577
- 11) 前掲書7)，PP49-53
- 12) 前掲書7)，P116
- 13) 前掲書7)，P115
- 14) 前掲書7)，P116
- 15) 前掲書5)，P42
- 16) 文部省編，日本教育史資料 参，文部省，1890，PP74-75
- 17) 前掲書16)，PP75-76
- 18) 前掲書16)，P76
- 19) 前掲書2)，P92
- 20) 大分県史蹟名勝天然記念物調査會，史蹟名勝天然記念物調査報告書第十三輯，1936
- 21) 大分県社会課，藩政時代の教育 社会教育資料第十一輯，1925，P213
- 22) 前掲書20)
- 23) 前掲書7)，P112
- 24) 名倉英三郎編，『日本教育史資料』の研究2 藩校編，玉川大学出版部，1993，PP507-512
- 25) 前掲書1)，P430

- 26) 前掲書1), P429
- 27) 前掲書1), P429
- 28) 前掲書7), P112
- 29) 前掲書1), PP464-465
- 30) 前掲書1), PP463-466
- 31) 前掲書1), PP463-467
- 32) 前掲書16), P75
- 33) 前掲書16), P75
- 34) 前掲書1)
- 35) 西山松之助, 家元の研究 西山松之助著作集第一巻,
吉川弘文館, 1990
- 36) 前掲書2), P97
- 37) 今永清二編, 中津の歴史, 中津市刊行会, 1980
- 38) 児玉幸多・北島正元監修, 新編物語藩史第十一巻, 新人物往来社, 1975
- 39) 藩校進修館跡 相原廃寺Ⅳ 中原遺跡 中津市文化財調査報告第11集, 中津市教育委員会, 1992
- 40) 濱田臣二, 小倉藩における武道教育, 北九州工業高等専門学校研究報告第28号, 1995
- 41) 濱田臣二, 福岡県における近世剣術流派の一考察, 北九州工業高等専門学校研究報告第31号, 1998
- 42) 濱田臣二, 福岡県における近世武芸流派の一考察 - 槍術・柔術・兵学について -, 北九州工業高等専門学校研究報告第34号, 2001
- 43) 濱田臣二, 思永館における武士教育, 北九州工業高等専門学校研究報告第30号, 1997
- 44) 木村礎・藤野保・村上直編, 藩史大辞典第7巻九州編, 雄山閣出版, 1988
- 45) 村上直編, 日本近世史研究事典, 東京堂出版, 1989

(2015年11月6日 受理)